

斜面崩壊・土砂崩れ61カ所

下北北部の大雨被害 弘大調査

「今後も再発の可能性」

弘前大学農学生命科学部の郷青穎助教は、応用地形学の研究グループは18日までに、大雨により土砂崩れが発生した下北半島北部の空撮画像を精査し、斜面崩壊や土石流・土砂流が計61カ所で発生したことを確認した。今後も雨量によっては、再発する可能性があるとして注意を呼び掛けている。

【1面参照】

撮影場所は、むつ市大畑町赤川村から風間浦村にかけての1帯。測量会社「アジア航測」と航空会社「朝日航洋」が撮影した。崩落していた61カ所の内訳は斜面崩壊が51カ所、土石流・土砂流が10カ所。斜面崩壊のほとんどは、高さ50メートル程度の海岸段丘の段丘

崖斜面に集中していた。堰堤により土石流が途中で止まっている場所が数カ所あった。

「むつ燧岳火山噴出物」

で構成されており、郷助教は「土砂崩れは、記録的な大雨が要因とはいえ、今後とも注意が必要」と話している。

（福士和久）

上記の画像は、当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。